
孤立化が進む社会と宗教のはたらき

『現代宗教 2023』編集委員会

阪神淡路大震災とオウム真理教地下鉄サリン事件から28年が経過したが、この間に日本社会で孤立化する人々が増大したことは多くの兆候によって知ることができる。子どもの虐待や孤独死やうつ病の増加、単身世帯の増大などがすぐに念頭に浮かぶ。また、事業継続の不安、老後の孤独や失業の不安、居場所のなさなどは生活実感として多くの人たちが感じていることだろう。

新型コロナウイルス感染症の流行は、こうした変化が強く実感されるようになった。また、孤立化という問題が現代世界に広く見られる問題であることもよりよく見えるようになってきた。日本に孤独・孤立対策担当大臣が設けられたのは2021年2月だが、すでに英国では2018年1月に孤独担当大臣が就任している。

人口の減少に苦しむ地域社会では、かつて地縁血縁の人間関係と密接に結びついていた宗教が、人々の集う場所として機能しなくなっていくことが懸念されている。寺院や教会の維持存続が危ぶまれる例も増えている。だが、コミュニティの再生に向けてさまざまな試みもなされている。東日本大震災後の被災地のように、宗教が新たな形で人々に居場所を提供したり、ケアし合う関係を生み出すことに貢献するような例も見られるようになってきている。

他方で、大都市は孤立の温床になっているようでもある。コロナ禍では大都市で多くの在宅死が起り、新たに貧困に苦しみ、住居を失うよ

うな人も出た。国境を超えた人々の移動もますます増加しているが、孤立化の要因の一つにもなっている。だが、他方で孤立する人々に手を差し伸べたり、居場所を提供したり、新たな支え合いの形をつくろうとする動きも増えてきている。高齢者や貧困者のケア、外国人や障害者の支援の活動の取り組みも目立つようになってきた。コロナ禍においても子ども食堂が増え続けていることは注目に値する。そして宗教がそうした活動に関与する例も珍しくなくなっている。

この特集では、以上のような社会の現状を見渡しながら、新たな形で宗教のはたらきが現出するようになっていくことについて考えていきたい。まだ小さな動きにとまっているものばかりかもしれない、だが、それらは困難が深まる現代社会に、宗教という視点から希望の光を投じているのかもしれない。

(文責：島蘭 進)